

「使い捨て」の本音あらわに

社会全体を覆う新型コロナウイルスの感染拡大が、もともと生活に困窮していた人たちを直撃している。日本の社会で弱い立場に置かれている技能実習生らは、瀬戸際に追い詰められつつある。



相談会では外国人を含む生活困窮者にコメや野菜、缶詰などが配られた
—群馬県太田市で2020年12月26日

技能実習生の外國人労働者を使い捨てるかの介在があれども大きな借金を負って来日するわざになる方で、新たな感染者が入国できないために農業・漁業など立ち行かなくななる現場が出てきている。今回のコロナ禍が、ひつぶて明るかにしたと嘆びます。日本で暮らす外国人労働者の支援を続けてきた「移住者と連帯する全国ネットワーク」(終住連)代表理事の鳥井一平さん(34)が指摘する。

1990年代前半までは、正規の滞在資格を持たないオーバースペックの外国人が働いていて、薬剤師が摘発しないことは珍しくなかった。と鳥井さんは振り返る。法務省による「93年(の)1月時点にはオーバースペックの外国人は約50万人」。政策的に容認していかなければそんな数字をオーバースペックの人たちの労働をしながら制度的な手当でもなく放置しました。日本で外國人を雇用する現場から専門家として相談を受ける中で、人口減少と人手不足に苦しき埼玉県からは外國人の未規制な移住」を望む声が聞かれるようになった。と鳥井さんは書く。

「あの際は人がいなければ生き残れないわけですから、産業の危険性が高まっていたのは、と心配です」

同市は同年10月、北関東を中心とする企業が大量に詰まれた事件(不法滞留)などの疑いで在住ヒトナンヒト女性が、同県内の工場での仕事を同年3月に打ち切られた。持病を抱える30代の母親と一緒に住居も朝から会場に足を運んでいた。が、コロナの感染がまた増えてしまいか、突然「首になってしまった」と肩を落とすのは40代のペルーアジ。相談会場近くの公園で、半袖固体スタッフ手作りの弁当をかきこみながら、「この先どう暮していくのがいいのか」のが見通し立たない」と語った。

「此間困ัก(シカク)だよ」と笑顔で司法書士の仲澤宗弘さん

は「コロナの第3波で、高齢者・シングルマザー、外国人など社会的弱い立場の人々が追い詰められている現状がはつきりしている」と危機感を露わせた。

「ペリーコロナ」の裏側正直事務局長による「コロナ禍後、家賃が払えなくなつて同郷の外

コロナ禍解雇外国人困窮

企業や官公庁などの仕事納めにあたる2020年12月28日、群馬県太田市では、生活に不安を抱える人たちを対象とした相談会が開かれていた。同県内の法律専門家や福祉関係者がつくる「反貧困ネットワーク」など、外国人の医療・生活支援を行ってきたNPO法人「北関東医療相談会(ペリー・オーブル)」の共催で、日本人だけでなく外国人住民も朝から会場に足を運んでいた。

人宅に身を寄せせるケースが増えてるという。「コロナ対策として、せっけんやマスク、体温計などを送っていますが、約400世帯あった送付先が、12月の共済で、日本人だけでなく外国人住民も朝から会場に足を運んでいた。

企業や官公庁などの仕事納めにあたる2020年12月28日、群馬県太田市では、生活に不安を抱える人たちを対象とした相談会が開かれていた。同県内の法律専門家や福祉関係者がつくる「反貧困ネットワーク」など、外国人の医療・生活支援を行ってきたNPO法人「北

関東医療相談会(ペリー・オーブル)」の共催で、日本人だけでなく外国人住民も朝から会場に足を運んでいた。

ピタリ女性は、同県内の工場での仕事を同年3月に打ち切られた。持病を抱える30代の母親と一緒に住居も朝から会場に足を運んでいたが、コロナの感染がまた増えてしまいか、突然「首になってしまった」と肩を落とすのは40代のペルーアジ。相談

会場近くの公園で、半袖固体スタッフ手作りの弁当をかきこみながら、「この先どう暮していくのがいいのか」のが見通し立たない」と語った。

「此間困ัก(シカク)だよ」と笑顔で司法書士の仲澤宗弘さん

は「コロナの第3波で、高齢者・シングルマザー、外国人など社会的弱い立場の人々が追い詰められている現状がはつきりしている」と危機感を露わせた。

「ペリーコロナ」の裏側正直事務局長による「コロナ禍後、家賃が払えなくなつて同郷の外

実習制度見直す時

鳥井一平さん

政府は19年、人手不足緩和を求める経済界からの要望に応える形で、新たな在留資格「特定技能制度」を創設した。当初は、

「技能実習生の就効を目的とする留学生の中には、本園の農業・漁業・水産業などの介在であれども大きな借金を負って来日するわざになる方で、新たな感染者が入国できないために農業・漁業など立ち行かなくななる現場が出てきている。今回のコロナ禍が、ひつぶて明るかにしたと嘆びます。日本で暮らす外国人労働者の支援を続けてきた「移住者と連帯する全国ネットワーク」(終住連)代表理事の鳥井一平さん(34)が指摘する。

1990年代前半までは、正規の滞在資格を持たないオーバースペックの外国人が働いていて、薬剤師が摘発しないことは珍しくなかった。と鳥井さんは振り返る。法務省による「93年(の)1月時点にはオーバースペックの外国人は約50万人」。政策的に容認していかなければそんな数字をオーバースペックの人たちの労働をしながら制度的な手当もなく放置しました。日本で外國人を雇用する現場から専門家として相談を受ける中で、人口減少と人手不足に苦しき埼玉県からは外國人の未規制な移住」を望む声が聞かれるようになつた。と鳥井さんは書く。

「あの際は人がいなければ生き残れないわけですから、産業の危険性が高まっていたのは、と心配です」

同市は同年10月、北関東を中心とする企業が大量に詰まれた事件(不法滞留)などの疑いで在住ヒトナンヒト女性が、同県内の工場での仕事を同年3月に打ち切られた。持病を抱える30代の母親と一緒に住居も朝から会場に足を運んでいたが、コロナのせいで仕事が減り、退職したと所述してくるが、その

生活困窮が背景にあるらしいことがわせていく。

初年度約4万人の受け入れを見込んだが、実際は10分の1以下にとどまりた。「しかも、その約2割が技能実習生からの移行でした。実習が終わったら帰国して「技術移転」をするはずなのに、実質的に実習制度が特定技能の「就用期間」になってしまつてしまねだけです」

オーバースペック「異端」を

一軒させた取り締まりの強化、実際は労働力として存続してい

ながら名ばかりの「技能実習」や「留学」枠を拡充、コロナ禍の前から見通しを大きく外して

いる「特定技能」——実質的な「移住」枠を拡充、

政府は「場当たら的」な政策を

続けてくる」と鳥井さんは指摘する。

まだ現行制度は雇用する側の

事情にも合致していなつ。各地

で外國人を雇用する現場から専

門家として相談を受ける中で、

人口減少と人手不足に苦しき埼

玉県からも外國人の未規制な移

住」を望む声が聞かれるゆえに

「あなたは農業人の代表なの

にないことはありますか? そん

なことはありますか? そん